

# 水を求めて創意工夫、農具に見る湖国の心。



田桶



サザエ



龍骨車



踏水車

「湖前引水」  
湖に流れ込む前に水を引く  
まず「地表を流れる水」を取り込むために「踏水車(滋賀では「ふみみずぐるま」と呼びます)」が広く使われました。水車を足で踏んで回し、川の水を田に入れる道具です。足で踏まずに手で回すものもありました。かつては中国生まれの「龍骨車(滋賀では「りゅうこし」と呼びます)」が使われていたのですが、寛文年中(二六六、一七一年)、大阪の京屋七兵衛と清兵衛が踏水車を発明、以来滋賀でも使われるようになったわが国独自の発明品です。

「踏水車は昭和三十年代ころまで使われ、特に湖北にはたくさん見かけましたよ」  
昭和四十年代まで下坂、世継の野菜産地を中心に使われていたのが「田桶(水かけ桶)」とも言います」です。二つの桶を水でいっぱいにして天秤棒につるして運び、畑の中で桶内の棒を傾ければ、底の穴が開いて水をまく一種の散水機です。

このほか、二つの桶を一人がひもで操り、川から田へ水を移す「取桶」や、木製の筒の中からせん状の木のスクリーンを付け、手で回して水を汲みあげる「サザエ(簡易手動ポンプ)」も使われていました。

砂や石の多い滋賀の地質では、かなりの水が地下へ潜ります。そこで地下水を利用するための工夫もなされました。代表的なのが「ハネツルベ」。ヤシロベエ状の灌漑井戸で、一方に重しの石(ちくわ石)、他方に竹やひもに下げ

## 水不足に悩まされてきた湖国の農業

琵琶湖があるのに水不足に悩まされてきた原因は独特の地形にあります。琵琶湖を底部とするスリ鉢状の地形で砂や石の多い傾斜地がほとんど。水が溜まりにくく、一度湖に入った水は戻せないため、「山からおりてくる水をいかに利用するか」に苦労したのです。そのため先人たちは知恵を絞り、さまざまな農具・農法を生み出してきました。

「お米も野菜も原則として年に二回の勝負。うまくできないと死ぬか生きるかですから、命がけで取り組まざるを得ません。さまざまな工夫を記した農書が各地にいっぱい残っていますよ(粕洲宏昭さん)」

られた桶を配し、深井戸の水を汲みあげたのです。ハネツルベは畑ごとに作られました。

## 農具にも土地に合わせた工夫

水に恵まれない原因を使った地質自体も克服すべき対象でした。砂や石の多い傾斜地をうまく耕作するための農具が発達しています。江戸期にほとんど全国の農村を調査して書かれた大蔵永常の「農具便利論」にも、滋賀の農具が記録されています。

代表的なものが滋賀にだけ見られる独自の鍬「海津の鍬」です。浜や山端を耕すのに使ったようです。

稲作後にナタネなどを栽培する際に使われた「江州鋤」も滋賀独自。ウネを立て水をけをよくするなど溝さらえ的な用途に使いました。

八合枧



## 最後は「人の情け」が飢饉対策

農具の工夫をいくら重ねても、不作や飢饉はやつてきます。農業はお天気頼みの営みだからです。不幸にして水不足などで不作となるとき、先人たちは「制度」でそれを補おうとしました。

例えば「枧」です。江戸時代、湖北では京枧より二割ほど容量の少ない枧が仏供米(仏に供える米の計量など年貢上納以外にも使用されていました。ルーツは戦国時代よりも古く、近江の寺領や荘園で使われていたとも言います。

これらは「八合枧」と呼ばれ、浅井亮政が作ったと言われる「浅井枧」や「武佐枧」「大津枧」「山門枧」などの名でも伝わっています。このほか、「治部少枧」、つまり三成が定めたと伝える枧もありました。

では、なぜ二升枧なのに八合の容量しかないのでしょうか。「説では「近江の国は八十万石。八合枧で測ると百万石となるため、国を大きく見せるために使われた」とありますが、「戦乱や不作のときにこれで年貢を収めさせ、疲れた領民を助けた」とする説もあります。

水が不足しがちなだけに、分ちち合つて生きるのを常としてきた湖国。後者の説こそ湖国の心にふさわしい気がします。

●写真・資料提供●  
写真と資料は下記の方々よりご提供いただきました。  
写真 撮影者 藤村 和夫氏  
前野 隆資氏  
滋賀県立琵琶湖博物館蔵  
資料 滋賀県立琵琶湖博物館  
長浜城歴史博物館  
高月町立観音の里歴史民俗資料館

